

---

# 神さま日和 1 冒頭

犬ガオ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

神さま日和 1 冒頭

### 【Nコード】

N8994L

### 【作者名】

犬ガオ

### 【あらすじ】

ゴールドenウィークに青年は魔の存在に出会ったのでした。

## （前書き）

オンライン創作マガジンももと。 <http://momoko.to.blog130.fc2.com/>に掲載予定小説の冒頭です。

神と魔は同一の存在だ。

正しく言えば、神と魔は同一の、人の集合意識より生まれたものである。

では、神と魔の線引きを誰が行っているか。

それも、人だ。

神と信じればその存在は神となり、魔と信じればその存在は魔となる。

要するに何が言いたいかというと、神と魔なんて分類は、人が勝手に理由付けをしたこと過ぎないということだ。

彼らの本質は、人が凄い、不思議だ、怖い、などの感情や概念をかたちにしたものであり、つまり、固定化された概念、概念固定体である。

では、神と魔の中間に居る概念固定体を何とさえいいだろうか。純粹な、本質的な概念固定体はなんというのか。

私は、この存在を「日和見神魔」と呼ぶことにする。

神になることもなく、魔になることもなく、世を傍観する、人の意識の体現者。

そんな日和見な存在がどれほどいるか分からないが、世界にそんな存在がいるからこそ、私たちの日常というものが成り立っているのではないか、そのように私は考えている。

神さま日和

日本には、五月頭の大連休、俗に言うゴールデンウィークがある

ことは、皆さんご存知だろう。

リーチ一発ツモドラ裏ドラ満貫のように続く祝日と、貴重な有給休暇を消費して数え役満として召喚されることもあるゴールデンウィークは、個人、家族で休日を謳歌する時、もしくは観光業界などのサービス業の稼ぎ時である。

そう、本来は、自転車で山の中を走り回り幻の銘酒を買って来いというバツゲームをする時間ではないはずであり、どうしてこうなった、と後悔しながら買い与えられた中古ママチャリの丈夫さを恨めしく思う時間ではないはずである。

ああ、くそ、部長め。ジェンガの最後のピース、絶対両手で取ってたどろ！

その時の俺は、そんな悪態を吐きながら、きいこきいこ、と可変速機能なんて先進的な機能を載せていないママチャリを漕いでいた。しかも、俺は道に迷っていた。携帯のGPS機能も電池がなければ動かないのは周知の事実だ。アスファルト一本道のはずの山道なのに、どうして今走っている路面は土なのか、自分の脳内アトラスデータの不備が露出していた。いや、空間把握能力というかむしろ中古自転車のライト輝度の低さのせいだろ、とそんな冷静なツツコミは当時の俺には無理だった。

山の中を迷い、深夜近くで、さらに助けも呼べない、そんな最悪な状態だと気づき、自転車を降りたときにはもう遅かった。

まさか、黄金週間という日本中が浮かれる時に、日本中のテレビを自分の行方不明情報が流れることになるとは。

そんな絶望が頭の中を巡っていたとき、月の光で微かに照らされた山道に、幽かな人影が見えた。

着物姿の女性だった。

ソメイヨシノの様な白く、背中を覆うほど長い髪。時代錯誤な、白い着物姿。175cmある自分の背に届きそうな背丈。大理石が血色を持ったような、薄桃色の肌。目尻は刀のように研がれていながら、その目は微笑んでいた。

「その若い方」

薄い唇が、布袂が開くように言葉を紡ぐ。

俺は一步も動けなかった。

その女性の絶世の美しさ、もあるが、今まで感じたことのない圧倒的な雰囲気飲まれていた。

「良い酒を持つてるじゃないか」

はっ、と我に帰り、自転車のカゴに積んでいた物を見る。

お使いに頼まれた、幻の銘酒（部長曰く）が一升瓶の中、たぶんと揺れた。

女性が手をゆっくり上げる。その手に持っていたのは、小さな徳利。

「わたしやにその酒を奢ってもらえれば、一晩泊めてやろう。どうだ？」

にい、と切れ味が鋭すぎる口元が上がった。

俺は確信した。

彼女は、『山姥』だ。

ガングロメイクで街中を闊歩するヤマンバ高校生ではない、本物の、魔。

【1】前置きと今の惨状じゃなく現状

話は戻ってきました現在。

あの忌まわしきゴールデンウィークから一ヶ月後である。

6月というものは春から夏にかけるとちつかな微妙な月であり、梅雨とか祝日無しとか一般的にも気が滅入る月でもあり、上昇する温度・湿度のせいでカレーがとても腐りやすくなっていく始まりの月である。

要するに、俺は6月は嫌いだ。

かと言ってもカメハメハ大王如き6月病を引きずるわけにもいかない。どんどん音が大きくなる目覚ましを止め、目を開く。

また蛍光灯が光っていた。

はあ、とため息をついてそのまま起き上がる。

簡素な組み立て式ベッドの横にあるコタツ机に、白く小さな物体がうつ伏せになっていた。そのうつ伏せ物体の下には、黒いノートパソコンのパームレストが埋まっていた。ディスプレイでは、某動画サイトの動画がリピートで再生中だった。

「おい、起きろ」

と俺はその物体に話しかける。もちろん動かない。

「……」

よく机を見たら、すさまじい有様だった。

勝手知ったる他人の家という感じが。まず酷いのはビール缶の多さ。ひいふうみい、数えて十二缶も机の上に積まれている。三五〇ML缶だから半ダース二つか。

そして、煙草の灰が皿の上に、文字通り山となって高く積もり、その天辺には年代物の煙管が刺さっていた。

とりあえず、俺はその惨状の後片付けを始めることにした。

缶を全部水で洗い、踏みつぶし、金属ゴミの袋に入れる。それが終わったあと、灰を捨て、皿を洗う。ついでに煙管もティッシュをこより、中にある灰を取り、布巾で金属部を磨く。あとは、空気清浄機のタンク内の水を替える。見事に茶色く汚れていた。土日にフィルターを洗わないとダメなだこれは。

そんな一連の作業を終え、俺は物体の後ろに立った。

さて、やっと本題に戻るとしよう。

俺はその白い物体の頭目掛けて、手に持った煙管を軽く振り落とす。

「……いたい」

くぐもった声が聞こえた。

「ほら、早く起きろ」

俺は続いて二回頭を叩く。いたっ、いたっ和二回連続で声が出た後、「ねむい」の一言が聞こえた。

「全く、何時まで起きてたんだ」

「あさがしらんできたときまでのきおくは」

四時五時まで起きてたのかよ。はあ、と俺はため息をついた。

「もう寝てる。俺は一限があるから」

俺は冷凍庫に入れてあった食パンを二枚取り、オーブントースターに入れる。ついでに冷やしておいたコーヒーをサーバーごとレンジに入れる。

「わたしやも行く」

しばらくしてから、少し頭が覚醒した物体が言葉を返す。

「どうせ部には出るんだろ？」

「もちろんだ」

「じゃあ部があるまで寝てろ」冷蔵庫からミルクといちごジャム、棚からはちみつを取り、コタツの上に並べる。

「わらわら動画よりも授業のほうが暇つぶしにはいい」

「そうかい」

チーン、とオーブントースターが鳴った。レンジも同時にチャイムを鳴らす。

「そっぴや鈴原は？」

トーストを乗せた皿とミルクがたっぷり入ったコーヒーとブラックコーヒーを机に並べ、スプーンを二つ置く。朝ごはんだ。

「寝るまで居た気がするが、帰ったのだろ」

「そうか。よし、できた」

むくり、と物体は顔を上げる。

白い髪の少女だった。ソメイヨシノのような、ほんのりと桃色がのった白い髪は相変わらずだったが、かつての刀のような目尻は、包丁のような目尻になり、あの鋭い眼光は今はどこへやらで、むしろミルク入りコーヒーに目を輝かせている。

俺はミルクコーヒーが入ったマグカップの中に、ハチミツをたっぷり入れ、スプーンでかき混ぜてから少女の目の前に置く。いただきます、と少女はそのマグカップを両手で掴み、そのまま、んぐん



ぐと数口飲む。

「ぶはあ、このコーヒーと言うものは本当にうまいな」

マグから口を離し、そのまま、イチゴジャムをパンに塗りたくり、攻略を始める。

いや、それは既にコーヒーとは言えないほどの代物だからな。俺はそんなツツコミを心の中で入れつつ、そのままブラックコーヒーを飲み、いちごジャムを塗ったパンに嚙りついた。

あの日、俺は山姥に出会った。

俺が出会った、初めての常識外の出来事だった。

そして、その出来事の痕は今も続いている。

その象徴が、この少女、『もゆら』だ。

察しが良い人はお分かりだろう。

この『もゆら』こそ、俺のせいで魔の力を無くした山姥。

おそらく、この世で最も非力な、山の神だ。

そんな神さまが既に俺の日常に溶け込んでいる。

いや、溶け込ませた、と言うべきか。その経緯はまた別の機会に話すとして。

「ふう、食った食った。ごちそうさま」

「おそまつさま。皿洗つといてくれ」

刻み煙草を丸め、煙管に詰めようとするもゆらに俺は仕事を与える。

「えー」

「洗つとけ」

「……しょうがない」

食っただけで何もしないのは許しません、そんなオーラが通じたのか、もゆらがすぐに折れる。

よっ、と体を起こす。もゆらは服は着物ではなく、下まですっぱり隠せる大きめの白いＴシャツを着ていた。というか俺のシャツだ。「洗ったら着替えるよ」

と言いつつ、俺は尿意が出たため、そのままトイレのドアを開い

た。

閉じた。

また開いた。

そこには、トイレで寝ている女子がいた。

背丈はもゆらよりも少し高い程度で、一見したら中学生にも見える外見。ショート黒髪といい、少しタレ目な顔といい、もゆらと正反対な顔つきだ。ただ似ているのは、両方共……多分心の中で思っても殺されるから黙っておこう。

こいつが原鈴<sup>はらすず</sup>。あだ名は鈴原。俺の友人で同回生で同じ部に所属している。

こいつと出会ったのは約一年前、お腹が減って倒れそうだった時に俺がご飯を奢って以来、俺の部屋に来てはご飯を食べている。今ではもゆらの相手をするのが多くなり、時々仲良く寝ている。

なので、寝ていても不思議はないのだが、ただ、状況がまずかった。俺はすぐに見る範囲を上の方に設定し、寝ている鈴原に近づく。

「……おい、鈴原、起きろ！」

俺は必死に肩を揺らす。

どうやら、用を足そうとした途中で力尽きて寝たらしく、下着が下まで下ろしていたのだ。

さすがにこれはまずい、早く起こさなくては。しかも、こいつも一限から俺と同じ授業じゃないか。

「んあ？ ……ぐう」

「起きろおおおお！」

「んるさいな…起きればいいんでしょ、起きれば……」

目を開く鈴原。状況を把握したらしい鈴原。

そして俺も未来を知る。

「……」

無言でビンタを食らわされた。しかも往復で二発。

「鈴原、よく状況を考えてください。俺が全般的に悪いのか？ あとビンタの前に下をはいてください」

鈴原の両手が高速で上下する。その後、額にチョップされた。

「痛いぞ鈴原」

「うるさい。あと鈴原、いう、なっ！」

今度は腹部にブロー。流石に態勢を崩す俺に、

「そして、出てけえ！」

鈴原のローキックが決まり、俺はトイレから飛んだ。

ごふ、と予想以上のダメージを受け、廊下で仰向けに倒れていると、洗い終わったもゆらがこっちを見つつ、にやけながら言った。

「良いものは見れたか？」

よし、一週間ビール禁止だ。絶対買ってやらない。

俺はそう決めて、しばし意識をブラックアウトさせた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8994/>

---

神さま日和 1 冒頭

2010年10月8日14時44分発行